

## アフガン陶房誌1977

桑山正進

アフガニスタンの陶房調査には1960年代に Kunduz, Tashkurghan, Istalif でおこなわれたものがある [Centlivres 1972, Centlivres et Demont 1967, Dupaigne 1968, Charpantier 1972, 吉田・小山1967]。調査目的がちがうから私の必要とする情報がすべてみたされるわけではない。そこで1977年7-8月に機会をつくり23所の陶房を調べた。地域は、Kabul, Parawan, Kapisa, Ningarhar, Bamiyan, Baghlan, Kunduz, Takhar, Samangan, Balkh, Juzjan の各州と Kandahar 市, Herat 市である。飲料水を一時的に貯める壺 (kuzah) は依然としてアフガニスタンの人々にとって必須の容器であることから, kuzah の成形法とこれに関わる技術を中心に観察を記録した。1980年以後の騒乱が伝統技術の保持にどんな影響をあたえたか、現段階では知るすべもないが、これに鑑みてここに調査の一部を公にし、調査の重要性をいち早く唱導された吉田光邦先生に捧げる。

Sistan とか Ghur とか Badakhshan は未調査であるが、調査の結果五つの陶器文化圏があることを知った。Tashkurghan 式, Kunduz 式, Bala Bagh 式, Kandahar 式, Herat 式である (図1)。Tashkurghan 式は Tashkurghan 以西にあって Hindukush 山脈北側の伝統をつたえる。Kunduz 式は Kunduz を中心にほぼ Surkhab 河以東にひろがり、西は Samangan, 東は Dasht-e Archi, 北は Imam Saheb, 南は Bamiyan, Parawan, Kabul, Ghazni, Jalalabad まで、Hindukush をおおきくまたいでいる。この式はもとは Kabul から Laghman あたりの製陶法であったものが北進して Tashkurghan 式を駆逐したのである。kuzah は Tashkurghan 式と Kunduz 式では40-50cmの高さ、Kandahar 式や Herat 式ではその半分の大きさ。それぞれ製陶法は異なるが、長頸、卵形の胴部、高台、把手つきという点では共通する。これら4式とまったく異なるのが、いまは Jalalabad の Bala Bagh に唯一残る Bala Bagh 式で、これはここからパキスタンやインドへ広く繫っていく丸底で把手なしの型式である。Kunduz 式 kuzah は Jalalabad でも生産され、Bala Bagh 式を蚕蝕しつつある。

ここでは Tashkurghan 式と Kunduz 式と Bala Bagh 式だけに限ってのべる。それはこの3式がアフガニスタンの東半の陶器文化を代表するとともに、Kandahar 式と Herat 式はこういった東半の文化とはそれぞれ独立しているためである。Kunduz における聴取によってここを中心とする陶工の血族関係を知ることができたが、その親族関係表はおおきなものであるので、要点だけを記すことにした。先学の調査との比較を省略したのは単に紙幅の制約による。

### 1. Kunduz 式

陶工は mashleqi とよぶ Pashtun であり、陶工たちが「quam を一にする (yak qaum)」というごとく、婚姻関係を通じて全150家がつながり、全域を包摂するひとつのおおきな血族集団を形成する。その祖は、いま2家族の陶工のみのさびれた Kabul の Deh Mazang 陶房にあり、4世代前にここから3家族が Kunduz に移住したのがはじまりで、次第に勢力を伸ばし、今日に至ったが、かれらももとを正せば Laghman の Alisheng の出身であり、mashleqi たるゆえんである。Kabul 市の周辺部 Kabul Bahi, Shina-e Kabul, Khairabad の陶房に Deh Mazang と近い係累がいる。

4世代前とは牧羊の Kandahari Pashtun が北部へ移住した時期で、Surkhab-Kunduz 河流域に入植して冬の住居と耕地をもった Kandahari Pashtun はいまも春夏に羊を移動し、Badakhshan — Kunduz 間を往復している。移住人口が増え、Kunduz 市の建設もさかんになると、陶工ははじめ移住者同士で婚姻関係を結び、Kunduz を中心に大家族となって増産をおこなった。ついで2世代前から山南の Qal'a-e Murad Beg の陶工と婚姻関係にはいり、これをもって Kunduz 地方各地に陶房を展開させ、需要に答えていった。古来 Kunduz-Takkar 地方で陶房を小規模経営していたのは Uzbek であったが、これにより圧迫されて Tashkurghan 以西に去り、Samangan 以東では Uzbek の陶房は消滅した。Uzbek 陶工が西へ移住後に技法を変えたわけではないから、いまみるところの Tashkurghan 式が Kunduz 地方の本来の製陶法であったことになる。

Kunduz 式では、同職同士の婚姻によって技術を父系で維持する。轆轤技術は主人格男子が受け継ぎ、他の職技から弟子を採らず、陶房作業はしたがって婦女子をふくめた家族労働が基本であり、陶房は何家族かの住居を兼ねる。Kunduz の場合は Hamal 月から Aqrab 月までの8ヶ月、Talaqan の場合は Hasad 月から Qaus 月まで9ヶ月を通じて作業し、他の3、4ヶ月は Laghman 地方に移動して休業することを特徴とする。

販売は同族が店舗を町の mandawi にもってこれにゆだね、あるいは陶工自身が市日に

仮設店舗でおこなう。Khanabad の店舗は mandawi に 3 軒, 町の西入口に 1 軒, 南入口に 1 軒あるが, ほとんど Kunduz 品である。Talaqan では mandawi に 3 店, ひとつは Kunduz 品専門店, ふたつが Talaqan 品を売り, そのうちのひとつは売り専門であるが, もうひとつは陶房の直売店で, 作陶中は閉店, 市日 (dushanbeh) だけ作陶をやめて開店する。Baghlan でも mandawi に対面した売店がふたつ。ここには政府直営の陶器工場があり, ひとつの売店はその製品, Kunduz 品, Baghlan 品を売り, もうひとつは Baghlan 陶房の直営店である。

陶房はどこでも町の出はずれにある。Kunduz は市北郊の旧市 Bala Hisar 脇(図 4 : 4)と現市南西部, Talaqan は西 5 km の Shahr-e Konah 地区, Khanabad は南郊 Bandar-e Shulab に向かう途上の Ter Tangi にある。Kunduz は陶工数, 窯数(5 基), 生産量ともに最大で, Ishkamish, Qal'a-e Zar, Aq Tepe, Dasht-e Archi から買い付けがあり, Hindukush の北, Surkhab 河以東, Dasht-e Archi 以西にひろく供給する。Kunduz 以外の陶房の地から買い付けがある理由は, 各地の生産量では不足気味ということのほか, Khanabad と Talaqan の製品は焼きあがり煉瓦色であまく, kham といわれてこのまれず, 白っぽい黄土色に焼き上がった Kunduz 製品の比較的堅緻な, いわゆる pokhta なる製品に人気が集まるからである。焼きあがりの差は粘土にあり, Kunduz 土は Kunduz 河岸段丘の坑道掘りによってえられた良質粘土である。Khanabad と Talaqan の土は赤色発色の元凶 shulah を含む。Talaqan 陶房は発色に顧慮しないが, Khanabad では塩を混入した Kunduz 土を焼成直前の器面にかけ, 白っぽい発色をえ, Kunduz 品に似せる工夫をする。以下に技法関係を Kunduz を代表として掲げる。

#### 轆轤

轆轤はすべて蹴り轆轤(chalkh)。材質は桑。天板(直径30cm)と蹴り板(直径60cm)を支柱(回転軸)の上下に固定し, 総高約 1 m。天板は円盤ないし薄いコマ型。轆轤は住居外壁にそった地面を方形に掘って設置し, 轆轤工は外壁を背に床にすわって作業する。穴の縁か, やや下方に陶工と直交する一枚の木板をわたして轆轤の支木とし, 支木の中心にひょうぐちをつける。ひょうぐちにグリスをふくんだボールベアリングをいれ, 支柱の回転を円滑にした轆轤を Mazar-e Sharif と Kunduz では使う。支柱の石付きに鉄をはめ, 板石で受ける場合がおおい(図 2 : 1, 3)。

#### 成形

陶工は作業室外壁を背にして轆轤にむかう。(1)轆轤の天板上に粘土紐を環状にして設置する。この粘土紐は製作に及んで設置する場合と半恒久的に天板上に硬く乾燥した

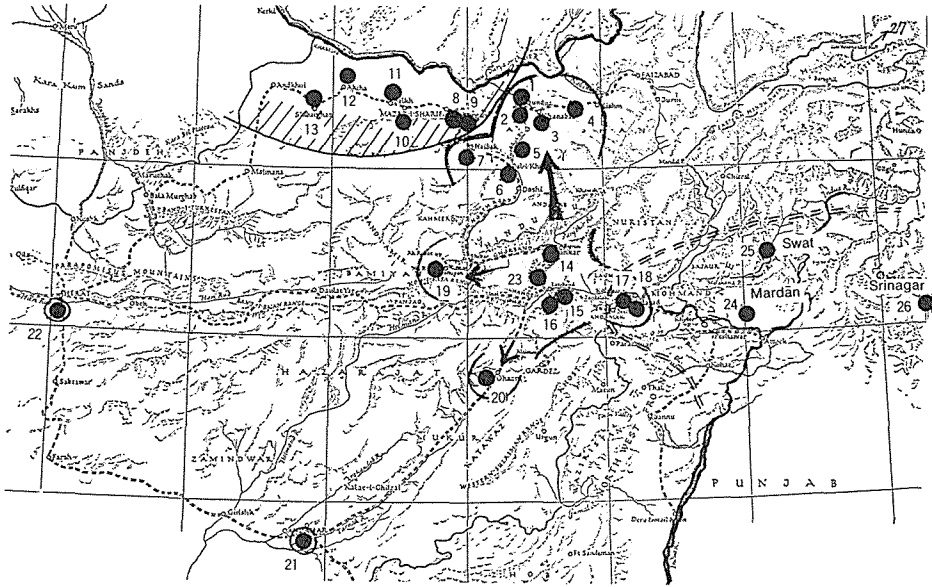


図1 陶房分布(黒線内は Kunduz 式,斜線部は Tashkurghan 式,破線は Bala Bagh 式, 1. Kunduz A, 2. Kunduz B, 3. Khanabad, 4. Talaqan, 5. Baghlan, 6. Pol-e Kumri, 7. Haibak, 8. Tashkurghan A, 9. Tashkurghan B, 10. Mazar-e Sharif, 11. Balkh, 12. Aq Chah, 13. Shibarghan, 14. Tutan Dara, 15. Kabul Bai, 16. Deh Mazang, 17. Reg Shah Mohammad, 18. Bala Bagh, 19. Bamiyan, 20. Ghazni, 21. Kandahar, 22. Herat, 23. Qal'a-e Murad Bag, 24. Shahbaz Garhi, 25. Fatehpur, 26. Srinagar)

状態で設置されている場合とがある。(2)その上に炮烙状の浅い皿をのせて轆轤を緩やかに回転させながら皿の中心と轆轤の軸をあわせる。(3)皿の上に砂をひとつかみ播く。砂は成形した個体を皿からたやすく離脱せしめる。(4)一塊の粘土を叩き伸ばして煎餅状にしこの皿にのせ皿全体をおおうようにさらに煎餅を押さえのばす。押さえるにつれ煎餅の周縁は砂のために若干持ち上がる。これは個体を皿から離脱することが容易であるか否かをあらかじめ試す意味をもつ。(5)陶工はその右脇にある粘土から一塊をこそぎとり太い粘土紐を手でこねあげる。長さは1mほどである。これを煎餅の周縁にきつくもみ押しながら一周させ固着させる。さらにもうひとつこんどはやや短く細い粘土紐を同様につくりさきに一周させた輪状のやや内側にもみ押しつつ固着させる。(6)利き足で轆轤を外へ蹴りだす。このときもういっぽうの足は轆轤を据えてある方形の穴の向こう側(陶工がすわる場所と反対側)の縁にあてがっている。右利きの場合は当然轆轤は反時計回転する。(7)No. 5の二重に置いた粘土の輪をひきあげつつ, kuzahの腰部から口縁までを成形する。肩から口縁を丁寧にしあげ, 頸部に柁目を利用して波状の紋様を施し, 以後把手をつける以外に手をくわえない。この部分についてはこの段階で完成で

ある。(8) 炮烙状の皿ごと天板からはずす。(9) そのまま小半時陰干しをする。場所はさしかけの屋根のしたか、それがない場合は露天で水気を含んだ布で覆っておく。(10) Kunduz では No. 9 の段階が完了したものに把手をつける。把手は片把手であり、粘土紐をうすい羊羹様にしたもの。女の仕事である。Khanabad では 2, 3 個轆轤成形する時間をおいて把手をつける。(11) 再び No. 9 の状態にもどして乾燥させる。(12) 皿からはずして、腹から底部を叩きしめる。女の仕事。Talaqan では鎌で底を削ってから叩く。Khanabad では叩くときに kuzah の内部に砂をほうり込み、器表に水をしゃっしゃっとして手でかける。叩き具を topak といい、斜格子の刻みを普通いれてある。土器の内壁をおさえる道具を gondak あるいは koteran という。この形態は出土品と同じであり、木柄装着のための孔があいているが、柄をつけずに直接手でつかむ。叩き具は紋様とともに粘土で見本をつくり、指し物師(najjar)にわたして造らせる。紋様は片面に一種類で、異なった紋様の合成はない。(13) 叩きを終了した段階で底部の形は、皿にあたったままの形から曲率をおおきくして尖底に近づいた形に変化している。それを逆さにして列置する。そういった底に女は砂を塗布していく。(14) 皿をはずした轆轤の天板は、No. 1 の状態である。天板上の粘土の輪のなかに kuzah をさかさまにして固定し、底部に木片でひっかききずを付け、粘土紐を環状に付着させ、轆轤を回転させて高台を成形する。この際削り成形はしない。No. 14 の段階で作業は再び男の手につづっている。以上で成型を完了する。(15) 本格的に kuzah を乾燥させる。(16) Khanabad の Kunduz 製品ににせた白っぽい焼きの kuzah の場合は、Kunduz 土 1 セールに対して 0.5 セールの岩塩粉末を混ぜた土汁を窯入れ直前にかける。(17) なお kuzah の口縁型式は作り手によりすこしずつ異なる。また轆轤担当と叩き担当とは完全に分業であり、両者はセットになっている。

#### 窯

khomdan とよばれる(図 3 : 2)。泥煉瓦と泥で造った直径 2 m ほどの円筒形窯で、室外に設置。上下二室と両室の境のロストルからなり、上室は土器をつめて焼く焼成室、下室は燃料を焚く燃焼室であり、狭い焚口が一口あいている。焚口のところの床から窯の上端までの高さは 2 m から 2.5 m。窯入れには人高以上あるため不便であり、これを解消するために、多くの場合土塀のそばに設置して土塀と窯との間に土段をつくり、そこから窯入れ窯出しをする。燃料を焚く段階で、焚口から風が不用意に燃焼室にはいらないよう、焚口の両側に簡単に泥煉瓦などで小規模な垣をつくる。あるいは焚口が地表から 100cm ほど掘り下げたところに位置する窯も多い。防風には都合がよい。この場合、窯は燃焼室の下半分ほどは地面より掘り下げてつくる。Kunduz ではみな焼成室の天井はな

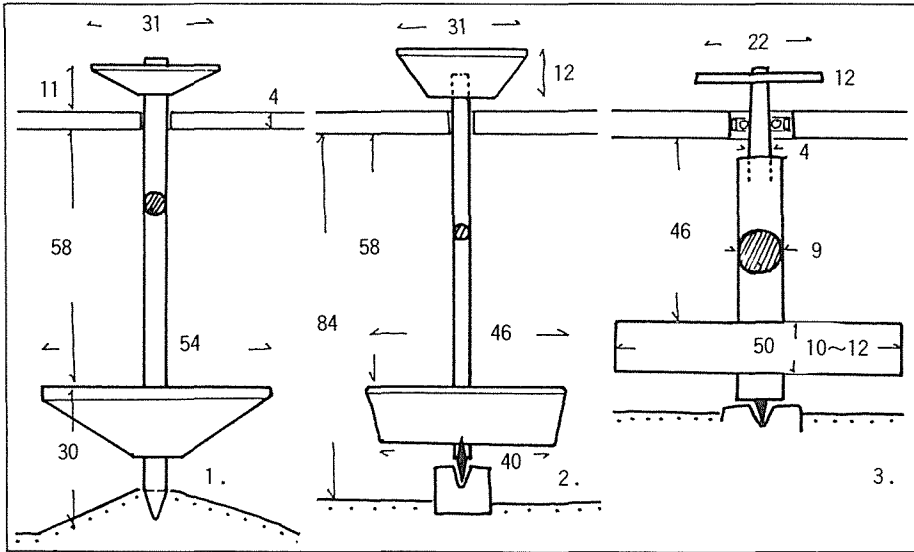


図2 蹴り轆轤(1. Kabul, 2. Bala Bagh, 3. Mazar-e Sharif)数字はcm。

く、開け放たれている。窯入れの最後の段階で土器片を全体にかぶせて天井とし、煙は天井の全体からたちのぼる。ロストルは平か、あるいは中心部をやや凸にしている。一方、ロストルの下面、すなわち燃焼室の天井はどこでも例外なくドームにつくっている。これは火のまわりを万遍なくするためと、ロストル上に積み上げた土器の重さによってロストルが崩壊することを防ぐ。

## 2. Tashkurghan 式

Tashkurghan 式製陶をおこなう陶工は、Tajik (Tashkurghan, Aq Chah), Uzbek (Aq Chah, Shibarghan, Andkhai), Turkmen (Aq Chah) であり、みな古くからこれらの土地の人間である。各地でそれぞれの陶房単位を構成し、各地間相互のつながりはない。

Tashkurghan では陶房はこじんまりした土塀の中にあり、きわめて清潔で整頓され、Kunduz のように敷地いっぱいには雑然とものおかない(図4:1, 2)。土塀内の南の一角に寄せて北向きの作業室があり、乾燥には直射日光を避けてその北陰をつかう。陶房は男子のみで、轆轤をひける主人格と補助作業をする弟子のふたりのみ。父子職技を伝授するほか、他の職能から青少年を採用して養成する。婦女子は参加しない。家庭にあって帽子づくりなどの手仕事をし、bazar に卸す。作業は年間を通じてすべて室内でおこなう。室内は夏は涼、冬は窯があるから暖。冬窯と夏窯各1基を室内外にもつ(図3:

3)。陶土は Tashkurghan 北方の dasht で採取。燃料は燃料屋 butawala から一窯分 2500 アフガニーで買う。Kunduz とちがい、陶工は製品を売店にわたし、売店は陶工に作業給与を月単位で定額を支払う。1977年現在主人は4000アフガニー、弟子は1000アフガニーの給与。いい給与であるが、陶房は賃貸で、家賃は陶工が支払う。

Tashkurghan には 2 軒の陶房があり、ひとつは職住別で、主人の住居は Pol-e Kalan にあり、職場である陶房は郊外にある。もう一軒の陶工は職住同一。陶工 Ostad Badal はすでに死亡しているが、その子供に Haji Alim と娘がいる。Alim は息子 Mohammad Omar とふたりで一軒の陶房を構成。娘は Mohammad Qayum に嫁いだ。その長男 Ya'qub は農業、次男 Mohammad Na'im は bazar の陶器店主、三男 Mohammad Ih は父と製陶に従事していたが、父 Qayum の死後は、Ostad Badal の弟子 Mohammad Sayed の陶房に移った。Sayed は靴造り職人の息子である。陶工 Badal 以前のことは不明であるが、Badal, Alim, Qayum, Sayed が一の陶房を経営していたが、Badal の死後 Alim と Sayed がわかれて二軒となった。Tashkurghan の kuzah 需要はほぼこの二軒で満たされるが、bazar には Shibarghan 製品の売店が一軒ある。

Shibarghan の陶房は Tadmala 村の 3 戸と Afshar Khana 村全 41 戸中の 6 戸で、各陶房はそれぞれの家系でまかなわれている。Afshar Khana では (1) Mohammad Shanif, Mohammad Halim の兄弟が轆轤のひき手で、Halim の義兄弟 Juma Gul と Abdullah, Shanif か Halim かの息子ひとり、兄弟の姉妹の息子 Qalim, この三人である。(2) Hassan が Ustad で、その娘婿 Egan Berdi, Egan の甥である Gafur と Saleh の兄弟, Hassan の息子 Mohammad Allah, Hassan の甥 Sayed Malahad, Egan の弟 Na'im。Egan Berdi は (1) の Shanif, Alim 兄弟の親 Mauland の弟子であった。(3) Mustafah Qol を頭目に、その息子 Abd al-Kalim, Ya'qub, Khaleq, Ghaib Allah と弟子としてよそからはいった Yusuf。Yusuf だけが轆轤をひけない。(4) Ma'jiti を頭とし、その息子 Ghulam Sakhi, および弟子の Gafur。Ma'jiti と Sakhi が轆轤のひき手、(5) Abd al-Aziz を頭に、その長男 Il Ghash, 次男 Abd al-Manon, 三男 Quduz, 四男 Saraj al-Din。Aziz と Ghash が轆轤のひき手で、ほかは下働き。(6) Ibrahim が頭で、その息子 Iskandar と Qadir。Ibrahim だけが轆轤をひける。Shibarghan の陶器店(kuzah-furushi)は Hassan, Halim, Aziz の直営店と、Shomon, Ramadan, Samon, Akhbar が経営する販売のみの店がある。

Shibarghan では、作業一切は六室構成の屋内でおこなわれ、一室は土置き場(図 4 : 3)。冬窯は方形、夏窯は円形で室外に 2 基あり、敷地内庭に壁に寄せずに設置する(図 3 : 1)。燃料は干し草と麦藁である。焼成の途中で麦藁をくべて製品の白色化を促進させ

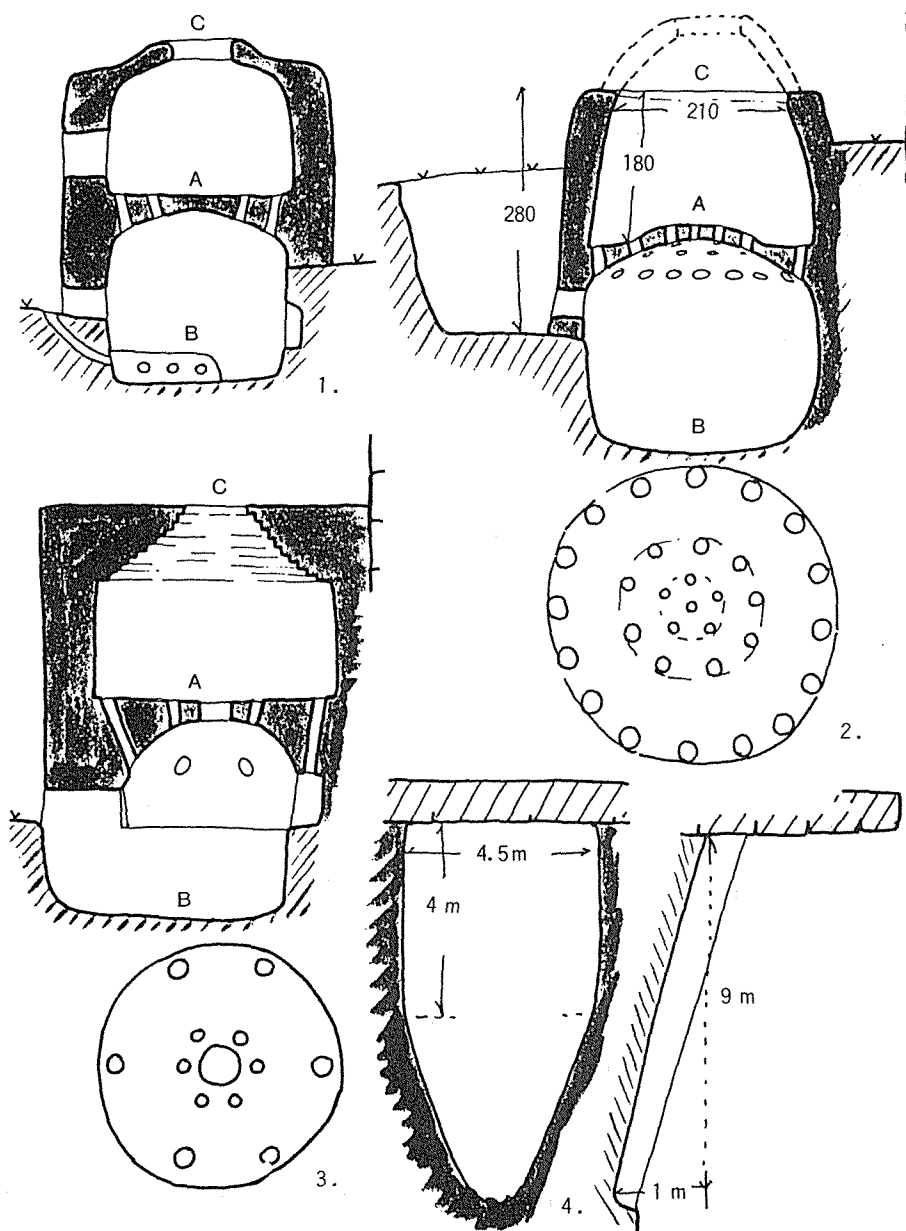


图3 窯(A. 烧成室, B. 燃烧室, C. 天井部, 1. Shibarghan, 2. Tutan Dara, 3. Tashkurghan, 4. Bala Bagh)



るという。Tashkurghan と異なる点は、(1)焼成室の横腹に火勢をみる1孔がある。(2)ロストル中央に孔なく、周縁に同じおおきさの孔がふたまわりある。(3)燃焼室天井はゆるやかなドーム。(4)焚口手前に小孔がある。それは地下を通して燃焼室の床の手前側(焚口の下)につくった泥煉瓦製の長方台に通じている。台の両側面に3孔あり、そこから燃焼室に酸素を供給するのである。他地ではみられない設備。(5)燃焼室の奥壁にフリット用の niche をつくる。

Aq Chah には陶房8がある。町北の陶房は土塀もなく、切妻屋根の屋内に轆轤2台を設置した作業場があり、乾燥は屋外である。屋外に二連の窯があるのが特徴で、冬窯はない。ロストルは中央に大孔をもたず、Shibarghan や Kunduz のように周縁に開孔する。以下に Tashkurghan 式技法の代表として、Tashkurghan の例を掲げる。

#### 轆轤

轆轤は蹴り轆轤。Kunduz のように屋外の地面に掘った穴に設置されるのではなく、室内の床(地面)上にあり、轆轤支柱の石付は床に接する。

#### 成形

(1)天板上に砂をまく。(2)粘土の一塊を円筒状にこね、直接天板にのせる。炮烙状の皿は使わない。(3)kuzah の腹部以上が成型される。とくに肩以上、頸、口縁は丁寧にしあげる。(4)天板から成型された全体をこそぐように取り上げる。天板上に粘土はほとんど残らない。ここまでで成形されたものは kuzah 全形の腹部以上、つまり上半だけである。(5)陶工の手のとどく範囲で半乾燥する。(6)ひき手は、轆轤を未だ許されていない弟子とともに、轆轤足下の床で乾いた kuzah を叩き締める工程にはいる。女は陶房に参画していない。(7)Tashkurghan では、唾をはきかけながら、まず素紋の叩き具 topak で腹部以下を叩きだして成形する。丸底ができあがる。この場合、叩きながら、こわれた甕の凹部に底部をあてがいつつ、底の形を整える。(8)次に、斜格子に刻みがあった topak で、肩から底を丁寧に叩きしめる。頸から口縁までは取り扱わない。Shibarghan では No. 7 の工程を行わず、No. 6 から No. 8 に直接至る。ただし No. 8 に至って底部に粘土をやや補足する。ただし底部がこのときまでに特に薄くなっているわけではない。(9)kuzah をさかさまにして並列し、乾燥する。乾燥のために並べてある kuzah の底部に弟子が泥漿を手で塗布していく。(10)乾燥のおわったものを天板にさかさまに置き、底部に粘土小塊を取付け、轆轤の回転削りによって高台を完成する。(11)陶房外壁にさしかけ部があり、そこで直射日光をさけつつ本乾燥をおこなう。特に冬場は室内の窯に隣接して架構してある棚で乾燥をおこなう。(12)焼成。

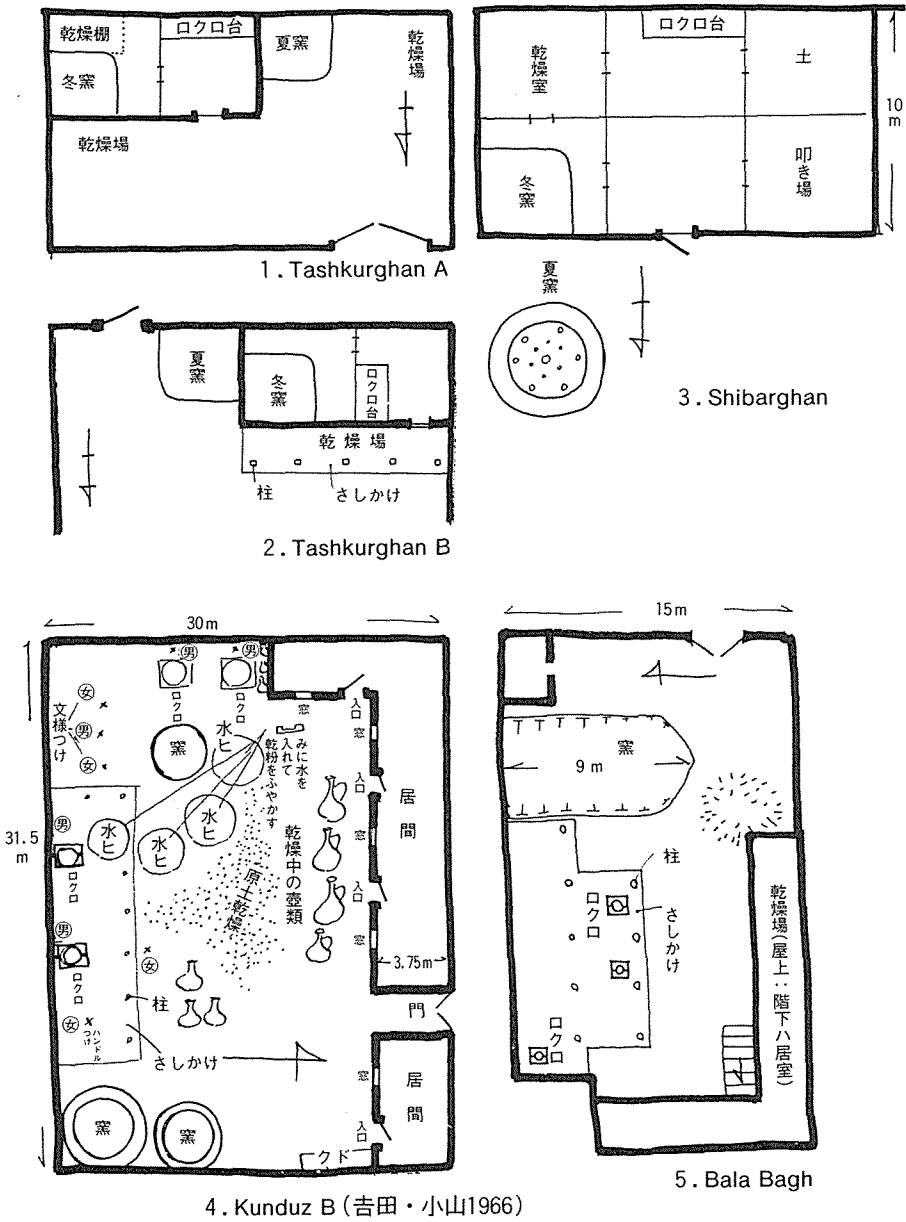


図4 陶房見取り図

## 窯

dash-kolali とよぶ。Kunduz 式でいう khomdan なる呼称は使わない。機能、規模ともに Kunduz 式の khomdan と基本的には同じで、上方に焼成室、下方に燃焼室をおく筒窯。khomdan には天井がないのに対して、天井を泥煉瓦を持ち送って狭め、ドーム状につくり、中心部のみを開ける。窯詰め窯出しにはこの開口部をつかう。したがって穴は成人男子がようやくはいれる大きさである。冬窯は作業屋の入口からもっとも遠い奥の一室の一隅に設置。夏窯は作業屋と土塀とで挟まれた一隅におく。冬夏用ともに外形は方形である。

窯は、焚口を地表と同レベルにおき、そこから掘り下げて円穴をほり、燃焼室下半分をつくる(図3:1, 3)。それから泥煉瓦を築いて約2mの高さの窯をつくるのであるが、その際穴の上端の周縁にそって築きあげるのではなく、ふちから水平に30cmほどの幅をおいてつんでいき、燃焼室の天井をドーム形につくる。この30cm幅の犬走り状の部分は燃焼室の高さのちょうど中央にあたり、そこに棚を一周させるといった接配になる。この棚は窯詰めの際に小型の施釉陶をおく。ロストルには中央に50cmほどの大孔1を開け、その周囲に等間隔に小孔6を開け、さらに周縁部に径30cmの孔をやはり等間隔に6開ける。ロストル周縁部の孔は燃焼室のドーム天井の裾に通じている。室内の冬窯もこれとほぼおなじ。ちがうのは、燃焼室天井が押し潰した形のドームである点である。

## 3. Bala Bagh 式

Bala Bagh は Jalalabad 西方22km, Jalalabad から Laghman, あるいは Kabul へ通ずる古道にある。ここは以上とは関連のない独自の製陶法、器型式、窯型式をもち、Jalalabad 在来の伝統を継承する。だれしも土地柄陶工は Pakhtun であることを予測するが、実は Tajik である。Burbur Shah, その兄の Faqir Shah, 息子の Daud Shah, イトコの Mullah Jan が開いている陶房1を残すのみである(図4:5)。

轆轤は Kunduz のように床下設置式の蹴り轆轤である(図2:2)。陶工は支木と直交して床にすわる。天板はコマ形で、厚さ12cm, 上面直径31cm, 下面直径16cm。蹴り板は直径46cm, 厚さ15cmで、二枚板合わせの円盤。支柱は天板と蹴り板とを直接つないでいる。支柱の石付は鉄で、板石の上に当たる。天板から穴の底までの高さは103cm。椀、浅鉢などの小型のものは一個体の成形に轆轤を使う。天板に背の低い円胴形の粘土塊をのせ、同種のものを数個一塊からつくる。すべて糸切りによって天板から離脱させる。

当地から東, kuzah は胴部が球形, 丸底で、他地と異なる。その成形は型づくりを主体

とし、轆轤は頸をつけるときに使うのみ。上半部の型には頸を接着するところにおおきな穴があいている。上半と下半の二個の型にそれぞれ粘土を押しあてがい、やや乾いて粘土がかたくなった時点で型からはずして両部を接合し、合わせ目に粘土紐をまき、さらに乾燥させる。半乾燥ののち上半部の中央の穴に口縁をつけて完成させる。このとき個体を轆轤にのせ、穴の周縁に粘土紐をおき、ひきあげて頸以上を成形、本乾燥にはいる。

窯は pajah と呼ばれる(図3:4)。他地の筒窯とは異なり、地面をわずかに掘り下げた平面的な窯で、ほとんど野積みである。平面形はペン先形の、細長い五角形で、陶房の敷地を囲む pakhsa 造りの土塀を奥壁とし、手前がペン先の先端にあたる部分で、焚口になる。掘り下げた窯の床は奥壁に向かってせりあがっている。焚口部分は60cmの深さ。奥壁に接する部分は20-30cmの深さである。奥壁部分は一辺の長さ4.5m、左右は4m。焚口から奥壁までの床の長さは9m。窯入れは1ヶ月に1回。まず燃料として干し草をしき、その上に牛糞を煎餅状にして乾燥させた燃料をおく。土器はまず大型を奥壁から順に置いていく。土器と土器との間の隙間にも牛糞燃料をいれる。並べた土器の上に牛糞をしき、さらに土器を並べて次の段をつくり、二段にする。最後に土器の破片をのせて干し草で覆い、灰をかぶせる。煙出しは造らない。2昼夜焼成し一日冷まして窯出しする。pajah は現在ここに残っているだけであるが、もとは Bes'ud, Riasad, Shah Mohammad Khan にもあった。

このような pajah は蹴り轆轤とともにパキスタン北部、つまりいわゆる Gandhara 地方に広がっていて、Jalalabad はその西端である。Mardan 地方の Shahbaz Garhi では土塀を奥壁とし、床が奥壁に向かってせりあがっている点、Bala Bagh とおなじであるが、左右に側壁を高さ85cmにつくることが異なっている。またここでは奥行は2.8m、幅2.3mの方形平面である。なお、ここは大形品の成形には天板に炮烙状の皿を使い、Kunduz 式である。また Swat の Fatehpur の陶房では窯が陸屋根上にあり、床は平らで、三方に壁をつくっている。

### 小結

Kunduz 式が Tashkurghan 式を駆逐して Hindukush をまたぐ一大陶器圏を形成したことは比較的近年の事態であり、それ以前においてはおそらく Hindukush 山脈以北は Tashkurghan 式陶器文化圏、以南はおそらく Kabul から Charikar まだがここでいう Kunduz 式陶器の文化圏であったはずである。それはともかく、現在の両陶器文化圏についていえば、形態は同じようでありながら、この両式における kuzah の成形法、陶工の

ありかたにはおおきな違いがあり、その違いがふたつの陶器圏を形成している事実を、陶房における観察と聴取によって知った。しかし、逆に、できあがった製品を破壊して陶器片を詳細に観察してみたところ、両式における成形法はある程度までは判別できることがわかったので、これによっても Tashkurghan 以西と以東とを区別することができるのである。陶房における技術を直接観察しないで陶器圏を設定することが可能であるからには、陶房技法の観察が不可能な古代に関してこのことはおおくの示唆を与える。

Kunduz, Tashkurghan, Kandahar, Herat を問わず、アフガニスタンの伝統技術による貯水用の壺 kuzah は長頸で把手が口縁から肩へとわたり、底は高台がつく型式であり、一方、窯は例外なく筒窯である。このふたつの特徴はアフガニスタンばかりではなく、Amu Darya をこえた地域にもおよんでいる。一方、Jalalabad では Bala Bagh 式 kuzah のようにこれとは全然系統を異にする型式があらわれ、それはインド=パキスタン亜大陸へと分布していく。この点で Jalalabad はふたつの型式の交差する地域である。Jalalabad がそのような交差の地域であったことは古い時代についても言える。つまりこの型式の分布は考古学上の時代に属するそれらの分布と軌を一にし、時代による消長はあるが、古代から一貫している。たとえば紀元後の一千年をみても、Jalalabad から東はいわば軟質の無把手丸底の赤色土器の文化圏であり、それより西や北は硬質の把手つき黄色土器の文化圏である。しかし、蹴り轆轤といった轆轤型式の面では Jalalabad もそのほかの地域と同じである。蹴り轆轤はせいぜいインダスまでで、それより東や南は地面に重量のあるおおきな石盤を天板とした手廻し轆轤となる。陶器の型式は東にひきつけられた型式であるのに対し、それを作成するための轆轤の型式は西のものである。Jalalabad からインダスにいたる地域はこの点でも東と西とが交差する。この地域は実は玄奘が『大唐西域記』で北インドにふくめた地域であり、玄奘は北インドをほかのインドと異なった曲俗地域とし、インドの正境ではないと観察している。製陶法に反映したこの地域の特性はすでに7世紀初頭には顕れていたのである。

これに関連して現代 Kashmir の製陶法はきわめて興味ぶかい。轆轤はインド全般と同じ地面に据えた手廻し轆轤。貯水用の壺は丸底の型式。ところがインド全般では窯は Bala Bagh 式の野積みであるが、ここでは筒窯である。しかし Jalalabad 以西のような使い方はしない。ロストルはあるから燃焼室と焼成室は備わっているが、使用に際してその区別をしない。ロストルの上に製品と燃料とを交互にいれながら窯詰めし、その燃料に火をつける。つまりロストルの上は焼成室と燃焼室を兼ねる。これは野積みの方法を本来の筒窯でいう焼成室においておこなうといった代物である。このような窯の扱い

方は Bala Bagh から Mardan や Swat にかけての窯と比較するとよい。Bala Bagh では地面に掘り窪めた野積みであったものが、Mardan や Swat では高い側壁を持つようになるから、Kashmir では側壁を一步進めて壁が全体を囲むようになったものと理解できるかもしれない。しかし、Bala Bagh はもとより Mardan でも Swat でもロストルはない。ロストルを備えた Kashmir の筒窯は一体どこから導入されたのであろうか。やはり Jalalabad 以西の型式との関連なしには存在しないであろう。筒窯は Kashgar でも使っているが、Jalalabad 以西とおなじ通常の使用法にしたがっている。北西インドにおける Kashmir の特異性はこんなところにもあらわれている。

### 参考文献

- Centlivres, P., *Un bazar d'Asie Centrale, Forme et organisation du bazar de Tashqurghan (Afghanistan), Beiträge zur Iranistik*, Wiesbaden, 1972.
- Centlivres, P. et M. Demont, Poteries et potiers d'Afghanistan, *Bulletin annuel du Musée et Institut d'Ethnographie de la ville de Genève*, 10, 1967.
- Charpentier, C.-J., *Bazaar-e Tashqurghan, Ethnographical Studies in an Afghan Traditional Bazaar, Studia Ethnographica Upsaliensia*, 36, Uppsala, 1972.
- Dupaigne, B., Aperçus sur quelques techniques afghanes, *Objets et Mondes*, 8, 1968.
- Saraswati, B., *Pottery-making Cultures and Indian Civilization*, New Delhi, 1979.
- 吉田光邦, 小山喜平『西アジアの技術 1964』, 京都大学, 1967.